婚礼夜

クリムゾン・ヴァンパイア

夏目 翠
Sui Natsume

立 ち 読 み 専 用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。
●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画　直江まりも

目　次

序章　闇の誘い　7
第一章　奇妙な屋敷の風変わりな人々　18
第二章　気持ちに及ぼす化学反応　43
第三章　嘘と秘密と脅迫と　69
第四章　印をつけられた意味　92
第五章　疑惑の種が芽吹くとき　118
第六章　母親に対する考え方　140
第七章　血飛沫の夜　165
第八章　契約は既に成された　186
終章　鮮血の罠　209
あとがき　228

婚 礼 夜

クリムゾン・ヴァンパイア

序章
闇の誘い

人類が火を手に入れた時期は諸説ある。百七十万年から二十万年と幅があり、日常的に扱うようになって、十数万年が経つと言われていた。その間、辺りを照らす松明は、ガス灯や電灯へと進化を重ね、闇を払ってきた。

しかし、光が強くなるほどに、できる影は濃くなる。

掛島橘香は今、それを肌で感じていた。

「っ……」

ネオン輝く繁華街も一本裏通りへ迷い込めば、法の及ばない世界と変わる。

さびれた通りには閉鎖された店舗が多く、橘香が助けを求めても、応えてくれる者はいない。

狭い路地を走り抜けると、いったん足を止める。

「そっちへ行ったぞ！」との声に急き立てられるように、ふたたび駆け出した。

そもそもは他愛もないナンパがきっかけだった。下卑た声掛けを無視して通り過ぎようとしたら、相

手が急に怒り出したのだ。適当に謝っておけばよかったかもしれないが、生来の気の強さが仇となり、男たちをさらに興奮させてしまう。三人のガラの悪い男たちに絡まれている橘香を見ても、通行人は見て見ぬ振りをするだけ。それでも諦めずに声を張り上げればよかったのかもしれないが、橘香の性格的にそれはできなかった。過去の経験から、他人に頼ることができない橘香はただ唇を噛(か)みしめる。もう少しその場にいれば、警察が来てくれたかもしれないが、助けが来るその前にどこかに連れて行かれそうになったので、橘香は逃げ出した。だが、それが間違いだった。

いつの間にか繁華街を抜け、人通りの少ない道に迷い込んでいる。

走り続けたために息は上がり、今にも胸が張り裂けそうだ。全身から汗がしたたっているにもかかわらず、握り込んだ拳(こぶし)は血の気が引き、指先の冷たさが際立つ。背中のリュックサックが重い。

こんなことになるならば、ここに帰ってくるのではなかった――と、橘香は心底後悔していた。

橘香が十二年ぶりに足を踏み入れた仲塚原(なかつかはら)市は、古くからこの地を治める一族の名前がつけられている。

仲塚原家の前身は江戸時代から続く材木問屋で、明治の世を迎える際に他の産業を取り込みはじめ、今では世界有数の巨大な複合企業(コングロマリット)を形成していた。会社が大きくなると東京に本社を移転させる時流に逆らい、頑(かたく)なまでにこの地から動こうとしない。そのため、この街の政治経済司法の中枢から末端に至るまで、仲塚原家の息がかかっていない場所はないと言っても過言ではない。

都市でありながら天然温泉が湧き、過去には何度も日本一住みよい街の称号を得たこともあり、今でも人気の高い仲塚原市だが、どんな場所にも闇はある。光の届かない一角で何が行われているか知る者は少ない。

昔住んでいたとはいえ、橘香は当時五歳だった。街の記憶は乏しく、今自分がどこを走っているのか、皆目見当もつかない。

闇雲に走りすぎて、自分が袋小路に追い込められていることに気づくのが遅れた。

前方に冷たくそびえる壁を前に、橘香の中で絶望が広がる。

「っ……どうしたら――」

「いたかっ」

複数の足音と共に声が聞こえてきて、橘香は焦った。引き返せば、確実に見つかってしまう。

外灯のない暗がりの中、手探りで逃げ道を探すと、ところどころ壁の崩れている箇所があった。中には入れないように、鉢植えが並べられている。その中の一つが枯れて、隙間ができていた。

深く考える間もなく、橘香はその隙間へ体を突っ込む。ボキッと乾いた音が聞こえ、枯れてもなお鋭い棘が、橘香の頬を傷つけた。

「痛っ」

ひりひりとした痛みに襲われ、血が流れる。それでも、他に道はない。何とか頭を出し、お尻を通そうとした。

「んっ……もう、ちょっと――わっ」

何とか壁の向こう側に出られた橘香は、擦り傷だらけの手足に構わず、ふたたび走り出そうとした――が、できなかった。

そこには月明かりを背に受けてそびえ立つ古い洋館があった。窓ガラスがところどころ割れていて、人が住んでいる気配はない。

割れた窓ガラスの隙間から中をのぞくが、何も見えない。それに、窓枠には鉄格子がはめられているため、中に入ることもできない。他に身を隠せる場所はないか、手探りで壁を探っていくと――

……っか

耳元で誰かに囁かれる。驚いた橘香は弾かれたように飛び退いた。

「誰っ」

辺りを見回し、男たちに聞こえぬよう声を抑えながら鋭く問いただすも、ぬばたまの黒い闇から返事はなかった。

確かに吐息が耳にかかり、誰かの指先が首筋を掠めたような感触がした。

しかし、誰もいない。

「……気の、せい？」

橘香はそう思い込もうとした。だが、額を伝う汗が止まらない。

七月下旬。今年も猛暑になるという予想通り、昼間の熱気が夜になっても滞っている。夏特有のむっとした夜風では、火照った体は冷ませない。

だが、この汗が止まらないのはそれだけではなかった。

——ここにいてはいけない。

異変を察知した橘香は後ずさり、建物から離れようと駆け出した。

「見ぃつけたぁ～」

「きゃああぁっ」

予想もしない場所から伸びてきた手に、橘香の腕がつかまれる。

カチリと懐中電灯を点ける音がして、顔が照らし出された。闇に慣れた橘香はあまりのまぶしさに目を閉じる。

「っ……」

灯りのおかげで、自分を捕らえる男の顔がにたりと笑い、その口元からのぞく舌先にはピアスがつけられていることまでわかった。

「捕まえたぞ。えらい手間をかけさせやがってぇ」

「塀登りなんて、ガキの頃以来だ」

どうやら三人は塀を直接越えてきたらしい。男たちの身長は橘香より数センチ高い程度だが、腕力が違うのだろう。橘香にはできないことを容易にやっ

てのける。
「ちょっ……放しなさいよ！」
　気丈に言い返すも、つかまれた手の震えは隠せない。男のほうもそれを感じ取っているのだろう。わざと顔をのぞき込んでくる。その表情には面白がるような、獲物をいたぶるような残忍さが垣間見えた。
「放しなさいっだってよ」
　ぎゃははっという耳障りな笑い声が、後ろから二つ聞こえてくる。
　橘香は身長が百六十五センチもあり、女性としては大柄だが、男性の力には敵わない。
「運が悪かったなぁ。よりによって、有名なお化け屋敷に逃げ込むなんて」
「っ」
　息を呑む橘香を余所に、鼻にピアスをつけた男が「そうなのか？」と首をかしげる。
「何だよ、知らなかったのか？　ここは昔、さる金持ちが愛人を囲うために造った屋敷だぞ」
「へぇ」
「蔦で囲ってぇ、逃げられないように窓に鉄格子まではまってんだ。昼間に見てみろ、すっげぇきもいから。さすがはあの家だよな」
「趣味悪ぃ……って、ちょっと待てよ⁉」
　途端に、もう一人の眉にピアスをつけた男の顔色が変わる。
「あの家ってもしかして……」
「もちろん、おまえの考えている通り」
　舌ピアスの男の言葉に、他の二人が焦り出す。
「まじやべぇだろっ。人が来たら……」
「大丈夫だって。ここはもう何年も前から無人だって。噂じゃ、金持ちに飼い殺しにされた愛人が自殺して、化けて出るらしい。……さてと」
　舌ピアスの男が両手を胸の前でだらりと下げ、幽霊の仕草をする。そして橘香の背負っていたリュックを奪った。
「返して！」

取り返そうとしたが、鼻ピアスの男に「大人しくしろ」と押さえつけられる。
リュックのポケットから財布を取り出すと、中身を確認する。
「さぁって、いくら入って――すげぇ」
「十九、二十、二十一……二十三万もあるぞ！」
男たちの声が歓喜に溢れる。
「……もういいでしょ。放してよ」
橘香は悔しさに唇を噛みしめたものの、お金は諦めるしかなかった。手持ちの全紙幣だったが、身の安全には代えられない。
橘香はこれで終わりだと思い、つかまれている腕を振り払おうとした。
「逃がしてもらえると思ってんの？」
拘束する力はまったく緩まない。
夏だというのに、ぞくりと背筋が凍えた。
見上げると、鼻ピアスの男と視線が合う。その目は細い上に鋭く、爬虫類のそれを思わせた。
「何言ってんのよ……お金なら……」
「このまま放したら、おまえはサツに行くだろう？それは困るんだよ」
なあ、と三人の男たちが互いに顔を見合わせる。
「おまえが絶対にサツに行けないようにしてやるよ」
眉ピアスの男がスマートフォンを取り出した。
男の卑劣な意図がわかった。橘香の肌は嫌悪感に粟立ち、体をよじる。
「イヤっ。気持ち悪い！　お金はあげるんだから、それで十分でしょ⁉　だいたい、こんなことしてただで済むと――」
「うるせぇなぁ」
捲し立てているところに、平手打ちが飛んできた。
頬が熱を持っても、何をされたのか咄嗟に理解できなかった。衝撃で体がゆっくりと倒れていくのを、まるで他人事のように感じていた。
頬に当たる地面の感触が、すべて現実だと教えて

くれる。
「うわーおまえ、容赦ねぇ」
「だって、ピーピーうるせぇんだもん。いいから、さっさと手足を押さえとけよ。写メ撮るから」
男たちは笑いながら、橘香のシャツに手を掛ける。ボタンが飛び、生地が裂かれる音がした。男たちの目に下着が晒された上に、フラッシュまで焚かれて橘香は血の気が引く。
「ヤだヤだヤだぁっ……痛っ」
必死で手足をばたばたと動かして抵抗するも、二回目の衝撃に口の中に鉄の味が広がった。
「うるせー」
殴った際に橘香の血がついたのだろう。舌ピアスの男が汚れを落とそうと拳を振った。
「やり過ぎんなよ」
「だってさ、抵抗されんのってうざいじゃん」
鼻ピアスの男に窘められても、舌ピアスの男は反省した様子は微塵もない。
「いっそのこと、もう何発か殴って気絶させっか？」
いくら気が強くても、殴られた痛みとショックで動けなくなっていた。そんな橘香に向かって、もう一度拳を振り上げようとしたところを、眉ピアスの男が止める。
「俺は起きてるほうがいい。泣き叫んで抵抗されんのを無理矢理とか燃えるし」
「ひでー奴」
「おまえに言われたかねぇわ」
下卑た笑い声を聞きながら、橘香は目頭が熱くなっていく。
どうしてこんなことになったのかと、胸の奥で反芻する。
十二年前、まだ父が生きていて、家族が家族として機能し、幸せに暮らしていた頃が懐かしくて、街に降り立っただけなのに。
「おまえがサツに行けば、今から撮る写メ、ネット

に晒すから」
男の声が遠くなりはじめる。
二回殴られたせいで、顔は熱を持ち、橘香の意識は朦朧としていた。だが、三度抵抗されてはたまらないと、男たちが相談し合う。
「あ、なら新しいヤツ試すか？」
眉ピアスの男が懐中電灯を地面に置いた。ポケットを探り、何かを取り出す。
「脱法？」
「確か名前が変わったんじゃね？　今は『危険』だろ」
「名前なんかどうだっていいっつうの。ちょうどパイプも持ってるし」
「おまえ、ジョイントじゃねぇんだ」
「こっちのほうがお手軽っしょ」
男たちが小突き合い笑い合う一方で、ぼんやりとしていた橘香の頭が明瞭になる。
――薬物を使おうとしている。
歴史の教科書で見たマッカーサーが吸っているようなパイプを顔に近づけられる。
「い、嫌っ……」
力を振り絞って抗うが、顎をつかまれて頭を固定されてしまう。
「大人しくしてろよ？　気持ちよくしてやるから」
下劣な声がして、橘香の最後の抵抗もむなしく吸わされようとしたとき――

……触るな

ふたたび、どこからともなく声が聞こえた。三人の動きが止まる。
「……今、何か言ったか？」
「いや、俺は何も言ってない」
「俺だって！」
パイプを持っていた眉ピアスが怪訝そうに辺りをうかがう。

不意に訪れた沈黙に堪えきれなくなった一人が叫んだ。
「だ、誰だっ……」
だが、返事はない。
うだるような空気を震わせたのは男の声と、木々の葉擦れの音だけだった。
「おい……逃げたほうがよくねぇか」
「やばくねぇ？　もしお化けだったら……」
「ぶるってんじゃねよ！　何バカなこと言ってやがる。しっかりしろっ」
すっかり怖じ気づいた二人を、眉ピアスの男が叱咤する。
自分から注意が逸れた隙を見て、橘香は叫んだ。
「助けてください！　襲われてっ……」
「だ、黙ってろ――ぎゃあっ」
橘香を黙らせようと咄嗟に拳を振り上げた舌ピアスの男が、手を押さえて悶絶する。
「な……何だよ。何があった⁉」
問いかける眉ピアスの男の声はうわずっていた。
「何かが手に……」
痛みに悶えながら説明する横で、鼻ピアスの男が悲鳴をあげて倒れた。
「いってぇっ！」

我らの宝に
手を出すべからず

先ほどと同じ声が今度はもっとはっきりと聞こえた。
「ど……どこにいる⁉　姿を見せろっ」
声の方角に気づいた眉ピアスの男が懐中電灯を向ける。わずかな光源に照らし出されたのは――
「誰だっ」
人影だった。だが、様子がおかしい。
橘香は何とか顔を上げたが、照らし出された人物は顔を隠しているらしく、何も見えなかった。

「ゆ、幽霊……？」
誰からともなく聞こえたつぶやきに、橘香は先ほどの会話を思い出す。
金持ちに飼い殺しにされた愛人が自殺して化けて出る。他愛もない噂のはずだった。
実際に、目の当たりにするまでは。
それは、ゆっくりとこちらに近づいてくる。

そは至高の存在なり
一族の命運を握りし者

まるで詩の一節のような文句が聞こえてきた。
「な、ななな何だよ、おまえ……」
眉ピアスの男が件の人物に近づき、その正体を暴こうと懐中電灯を向けたときだった。
人影が動く。
「ぎぃやぁぁぁぁっ――――!!」
眉ピアスの男の腕が切断され、懐中電灯が地面に転がった。
橘香の顔に生温かい雫がかかる。
「腕がっ……俺の腕が」
さらに人影は手を伸ばし、痛みにのたうち回る眉ピアスの男の頭をつかみ、引き寄せると、首筋に噛みついたのだ。
さながら、獣が獲物を屠るような光景だった。

廻りし運命の輪よ
花嫁を我の元へ……

「う……わぁぁぁぁぁ!!」
恐れおののいた他の二人の男たちは何もかも放り出して逃げ出した。
男たちの足音が遠のき、やがて完全に聞こえなくなると、地面に落ちた懐中電灯の光に浮かび上がった人影が、まるで橘香に狙いを定めたかのようにゆっくりと近づいてくる。

だが、橘香は動けなかった。殴られた痛みのせいで、意識が急速に霞(かす)んでいく。

――このまま死ぬのかな。

閉じた瞼(まぶた)の裏に浮かんだのは、母の顔だった。

母の最後の頼みを無視してこの街に来たのは、橘香の判断だった。今さら後悔してもどうにもならない。母親が哀(かな)しんでいなければいいが。

そこまで考えて、橘香の意識は闇に呑まれた――

第一章

奇妙な屋敷の風変わりな人々

――許してあげて。二人とも忙しいのよ。

母はベッドに横たわりながら、憤慨する橘香の手を取ってなだめようとする。だが、その指に力はない。

病魔に冒された母の体はどこもかしこも痩せ細っていた。頬からは丸みが削げ落ち、腕も胸も骨の形がはっきりと見て取れる。肌はかさつき、粉を吹いていた。

――あなた一人に重荷を負わせてごめんね……。それだけは悪かったと思ってる。

そう言って、母は橘香に何度も謝るのだ。

重荷だなんて、そんなこと言ってほしくなかった。橘香はただ、母の側にいたかった。

しかし、母に残された時間は少ない。

今にも消えてしまいそうな恐怖を抑えて、橘香は

――

夢を見ていた。わずか数ヶ月前の日々を思い出すだけで、涙が滲む。

柔らかく少しひんやりとした何かが、何度も顔に押し当てられる。額、瞼、頬ときて、唇を割ったと思ったら、鉄臭い味が口の中に広がった。それから、ちくりと首筋が痛んだような気がして、重い瞼を何とかこじ開けると――

見知らぬ若い男性が覆い被さるようにして、橘香をのぞき込んでいた。

「……」

一瞬、まだ夢を見ているのだと思った。そうでなければ、こんな間近に人の顔があるわけがないと――

不意に、男性の指が橘香の頬を撫でた。夏だというのに、冷えきった感触に、霞んでいた橘香の意識が覚醒する。

脳裏に男たちに押さえつけられた記憶が甦った。

「っ……きゃあああっ」

悲鳴をあげ、咄嗟に男性を突き飛ばした。

ごとりと相手の男が床に落ちる重い音と共に、体は軽くなる。それでも、橘香の興奮は収まらず、手当たり次第つかんだ物を投げつけた。

「いや！　側にこないで。あっちへ行ってっ……いやあぁぁぁ――――！」

「……おい」

ベッドの下から不機嫌そうな声が聞こえるが、恐慌状態に陥っている橘香の耳には届かない。

「どうしたんです⁉」

バタバタと足音がして、勢いよく扉が開いた。

ぱっと部屋が明るくなり、橘香は顔をしかめる。

入ってきたのは眼鏡をかけた若い男性と、白髪まじりの頭の初老の男性だった。橘香と、ベッドの下で枕とクッションにまみれている男性を見て、目を丸くする。

「アレクさま……あなた、こんなところで何をして

いらっしゃるんです」
「味見だ」
アレクと呼ばれた、床に座り込んでいる二十代半ばの若い男に悪びれた様子はない。
橘香は身を守るように両腕で自分を抱きしめながら、事の次第を見守っていた。
「アレクさま、お手を」
「ああ」
少し落ち着いてくると、この場で一番偉いのがアレクだとわかった。初老の男性の手を借りて立ち上がるアレクに、童顔の眼鏡の男性が喰ってかかる。
「僭越ながら申し上げます。若い女性の寝室に勝手に入られるのはいかがなものかと」
「ノックはした」
「はあっ？」
備え付けられた革張りのソファにふんぞり返る男の態度に、橘香は信じられない思いで声をあげた。
寝ている部屋に無断で入ってきただけではなく、勝手に体に触られたのだ。橘香としては許せるわけがない。
「一応、礼儀は守られたようですね」
苦笑する初老の男性に、思わず「どこがだ」と文句を言いたかったが、言葉が出てこない。わなわなと唇を震わせる橘香を見てか、若い男は呆れたように息を吐いた。
「……許可する言葉は聞かれましたか」
「聞いてない。それがどうかしたのか」
アレクは顎に手を当てて、小首をかしげている。
罪悪感など微塵も感じられない。あまりの言い草に、橘香の堪忍袋の緒が音を立てて切れた。声を張り上げる。
「あなたねぇ！　いったいわたしに――」
「我が入りたいと思ったから、そうした。何か文句でもあるのか」
アレクが長い前髪を掻き上げる。
彫りの深い、くっきりとした目鼻立ちが顕になる。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。